



Title	武田泰淳『月光都市』論
Author(s)	松本, 陽子
Citation	阪大近代文学研究. 2004, 2, p. 28-38
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92623
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

武田泰淳『月光都市』論

松本 陽子

はじめに

武田泰淳の『月光都市』は、昭和二十三年十二月、雑誌「人間美学」に発表された小説である。『月光都市』は、これまでの研究史において未だ詳細な作品分析が試みられていない作品であるが、注目されてこなかったその理由として、これまで指摘されてきた武田の戦後の文学活動の出発と中国への罪悪感^①を結びつける捉え方に本作が当てはまらないことなどが考えられる。

本作は、第三者の語り手が日本人青年杉の戦時下上海における「ある一日」を物語る形で展開されるが、中国との距離関係を重要視する杉の姿勢によって繋がる二つの物語、〈月光都市〉の〈発見〉の物語と、杉と中国人少女間の交流の物語という、二つの物語によって作品世界が構築されている点に特色がある。そこで本稿では、まず各々の物語で展開されるモチーフを拾い直していく。その上で、後日談的に登場する「今の杉」が「ある一日」を「いつまでも消えやらずにい

る」と感じるに至る理由を明らかにすることを目的とし、二つの物語の相互関係を考察していく。

まずは、「支那文化の研究」の〈よりどころ〉を喪失した杉のありようを確認し、次いで〈月光都市〉の〈発見〉が杉の認識をどのように変えていくのかその道筋を辿っていく。

一

本作は、租界統治によって生まれた「西洋的支那」と、従来からの「中国的支那」が混在する戦時下上海が作品の舞台となっているが、同時期に発表された『審判』（昭二十二・四）、『蝮のすえ』（昭二十二・八・十）に比べ、当時の時局的要素が十分に描出されていない感がある。とは言うものの、作中人物杉の造型から、戦時下上海に居留する日本人を取り巻く状況の複雑さを窺い知ることができる。この杉の造型の有する問題点は次の二点である。

第一の点は、「对中国文化事業」^②に関わる人物として設

定されている点である。このため杉には中国人に対する加害者としての属性が必然的に付与され、その結果生じる葛藤によつて、「ことに相手が中国人である場合、余計」対人関係に自信の持てない状況に置かれてしまう。この設定は、後述する杉と闇の交流の中で重要な意味を持つ。

また第二に挙げられるのは、「支那文化の研究」者である杉が、国際都市上海との直接的な「接触」によつて、既成の書物の上での「研究」の理念に沿ったそれまでの自身の中国との関わり方が通用しないことを自覚し、「よりどころ」を見失つたとされている点である。杉は「研究が無用だったのなら、旅人の感覚で感じるだけでもよい」と「旅人」の立場からの「発見」を希求し始める。ここで杉が重要視しているのは、次の引用に見られるように、中国民衆の現在のな生の領域である「街の雑沓と喧騒」と、その中に身を置く自らの感覚、意思である。

杉は何か心淋しくなったり、腹立たしくなったりした時は、中国人の街の雑沓と喧騒の中に歩み入ることにしていた。物売る声や物買う声、ののしり笑う顔や呆然たる顔、それらあからさまな騒音や表情にとりかこまれていくと、かえって狼狽な憩いが単純な、いくらか考えぶかい想いに変つて来て、足どりもおちついて来るのであった。

このように、杉が「研究」の理念に代わる（発見）の方途として「旅人」の視点、つまり、理論や主義、民族的出自と

いった問題からは距離をおいた、しかし現実との直接的な「接触」である、〈見る〉こと、〈感じる〉ことを基軸とする視点を設定している点に注意しておきたい。

二

本作の特色として、〈月光都市〉の描出に見られる映像喚起力の鮮やかさ、印象深さが挙げられる。作中では、月光が日常の時間を寸断し、非日常的な空間を創出するさまを「月のせいで、遅い電車が速く走る感じがした」、「牛小屋の前を通り越しても、今日はしめつた臭気が鼻をつかなかつた」といった表現に見ることができ、〈月光都市〉へと変貌した上海は次のように描かれている。

上海の街がこのように美しく見えたことはかつてなかった。醜い形がごとく消え、あざやかな、清い色だけが洗い出されていた。（中略）青く淡い月の光りに押しつつまれた街は、それが街であるために、なおのこと良かった。それはただ月の光りの明るさが良いばかりではない。自然の月の光りではあるが、やはり、自分の住む上海の街に照りわたつてくれる光りであった。

続いて、〈月光都市〉空間における杉の描かれ方に注目してみる。表現を一瞥すればこの箇所の特異性はすぐに看取されるであろう。

ようやくにしてその忘れていた月を発見したのは、電

車がアルペール路から動き出した頃であつた。八仙橋からここまで、月はたしかにクッキリと空にかかつていたはずであつた。その月は金紙でこしらえたように、やや赤みがかった金色で、平たく中天に見えていたはずであつた。月自体が建物の陰になつてはまたあらわれる。陰になるたびに、その光がかえつて明るくひろがり、市街全体が青白く浮き上つたはずであつた。なかば睡入つていたのか杉はそれに気づかなかつたのだ。

(傍線引用者。以下同じ)

これまで杉の内情を直接知り、語つてきた語り手は、ここで杉の内情には触れず、微妙な変化を見せている。同様の、極めて似通つた描出の方法を『快樂』(昭三十五・一―三十九・十二)に見ることができる。

月の光は、坂のてっぺんにも、坂の途中にも、横にそれた小路にも照りわたつていたはずであつた。ことに、水の匂いの立ちのぼる川と川岸、それをわたる橋の上に、蒼白い光は降りそそいでいたはずだつた。しかし柳は、ぼんやりと夜空のあかるさを感じとりながら、今まで、月の光を浴びているとか、星がかがやいているとか、はつきりと身にしみてはいなかつた。落葉の匂いのただよふ寺の裏手に歩み入つてから、はじめて今夜は、月のいい晩だと、あらためて思つたのだつた。(中略)その子供じみた競争心や、あせりが、月の光でうきあがつた電柱や、ゴミ箱や、板塀のつづく空間ににじみ出し、ひび

きわたるようであつた。柳は、三人の刑事の心のうごきの一つ一つが、月あかりであからさまに感じられてくるような気がした。

作中人物柳は、しばらく後に「あらためて」月光を意識し始めるが、この月光を意識する心理的変化が、柳を新しい認識の獲得へと導いている。「月光都市」においても同様に、月光を意識する心理的変化は杉を新しい領域に促す機能を持つている。「月光にまどわされ、酔わされた興奮」を自覚する杉は、「歩くことにした」と道順を変更し、その結果、後述するように「発見」新しい認識の獲得へと至つている。また描出の形は異なるが、『人間以外の女』(昭和二十二年)では、「その夜は仲秋節に近く、明るい月の光が夫婦の寝室に射し込んでいた」とされ、「ますます冴えわたる月光によつて「あからさまに照し出され」たのは、女房の正体は実は蛇であつたという「真実」であつた、との展開が導かれている。

以上の検討から、武田作品における月光は、それまで作中人物にとつて不可視の状態にあつた「真実」が可視の状態へと変化する場合で用いられる、重要なモチーフであることが明らかであろう。この点をふまえた上で、杉の「月光都市」の「発見」の物語がいかなるものであつたのかを言及していく。

「月光都市」によつて照射される杉の意識は、時間の推移

に即し、〈月光都市〉の〈発見〉の感動から再び中国民衆へと向かう。中国民衆と「異国人」である自身とが、同じ〈月光都市〉を共有する関係にあることに共生感を覚え、「贅沢無比な楽しみ」と感じる杉は、中国民衆の生活の場、「中国的支那」へ歩みを進める。この杉の意識の一連の動きから、杉が他者（中国民衆）を意識し、その関わりにおいて自己を捉える人物であること、また〈月光都市〉への注視が、〈見る〉対象であった中国民衆に対する認識の深化を促していることが確認できる。

本作では、戦時下上海の時局的要素とは無縁な存在として中国民衆が描かれ、その生活感情に近付くことによつて満足感を得る人物として杉が強調されているが、この後、杉が遭遇する中秋節の祭の光景は、「支那文化の研究」者である杉の有する漢学の影響を受けた「支那文化」の知識、或いは感傷的な〈支那趣味〉、また国家や民族の問題とも切り離された、祝祭的、調和的な空間である。

貧しげによりそった家並は、月光の下でもやはりみすばらしい姿であるが、気をそろえて焚きはじめた小さな焔が、お互いの気心を結びあわせるようで、「中秋節なのだな」と思わせる力はなかなか強かった。（中略）物音など淋しいのに、やすらかな、楽しさのようなものが、天上の月と、下界の人々をつないでいるように思われた。「中国的支那」の「赤い」「小さな」「秘密の光」を媒介として、杉は中国民衆の生活レベルでの信仰心、「気心」と対峙

する。この杉の中国民衆への感情的な共鳴は、次に示す、「今の杉」の想起する光のイメージとも矛盾しない。

その夜は月が明るかったが、その明るさには、さまざまな物の形やうごきを、一つの象徴につつまたかめてくれる秘力があつて、ふだんなら想つてもみない神々のことなど想い起させるのである。

以上述べてきたように、本作では、杉が「中国的支那」、つまり中国民衆の現在的な生の領域を、求めるべき中国の形として理解し、「象徴」として捉えるに至るまでの過程が、月光及び祝祭的光のイメージとともに描出されている。かつて、権力やイデオロギーでさえ、人間の歴史に比べれば微細な存在にすぎないことを『司馬遷』（昭十八・四）で明らかにした武田は、本作で権力やイデオロギーとは無関係な中国民衆の生を強調し、それら中国民衆と杉が同化していく過程を描出している。

また先述したように、杉がそれまでの「支那文化の研究」の（よりどころ）を失い、「旅人」という立場を選び取り、

（前略）今まで日本の文学者の見出し得なかったものを、自分で見出さなければならぬ。何か深い美しい感情で、この上海を新しく発見できないであろうか、何か身にしみわたる啓示がこの町に足をとどめた自分の上に降りかかつて来ないであろうか

と切望する人物であったこと、その希求の強さにこそ、このような中国民衆への接近を可能にした要因があったと考えら

れる。つまり、〈月光都市〉として変貌した空間内で、単なる表層の〈発見〉にとどまらず、より深みを持った〈発見〉を杉に可能にした要因は、杉が自身の〈よりどころ〉を喪失しながらも、現実を容易に裁断せず、執拗に中国民衆の現在のな生に〈よりどころ〉を求める「研究」者であったことにある。このように捉えれば、武田が現実からの逃避願望、離脱願望を意図して非日常的〈月光都市〉を構築したのではなく、或いは中国民衆とそれに関わる杉を過度に美化しようとして調和的〈月光都市〉を構築したのでもなく、逆に、厳しさを伴う現実を肯定的に理解しようとする姿勢から構築したことが明らかであろう。

しかし中国人少女閻との再会が、こうした杉の〈月光都市〉の〈発見〉の物語を一義的に収斂させることを妨げる。閻との再会に至る以前では、前述のように月光の「秘力」を用い、杉の抱く中国への願望を回収する象徴として中国民衆を〈発見〉する物語を導いたのに対し、再会以降は逆に、月光の「秘力」を失わせることによって物語を展開させていく。

閻と杉の再会の場景に見られる、月光の描かれ方を確認してみる。両者の再会は「月の空が高く開け」た、「月明の街」Ⅱ〈月光都市〉内においての偶然的出来事であったが、「月が雲に入ったのか」、「陰気な空だけが垂れ下っていた」、「閻の中」と、場景から徐々に月光が失われ、やがては全く消えてしまう。この〈月光都市〉の光、「秘力」が弱まっていく設定のありかたから、杉の感情状態Ⅱ「月明の想い」が否定

される、或いは失われるといった二ユアンスを読み取ることが可能であろう。この再会が杉にもたらす意味については、後に詳述したい。

これまで述べてきた、〈月光都市〉における杉と、中国民衆との精神的な共鳴に至る〈発見〉の物語は、もう一つの物語、閻との交流の物語とどのように関わってくるのであるうか。次章ではキリスト教を介して展開される、二つ目の物語について考察していく。

三

杉と閻の関係を考える上で、まずおさえておかねばならないのは、杉の閻に対する感情には常に揺れが見られること、それとは対照的に、閻は常に「杉を味方と信じ」ていることである。この両者の関係の不確かさを端的に示している、閻を誹首する案が持ち上がった場面を見てみる。周囲の意見に従い、閻の誹首に賛成する立場をとった杉の感情の揺れは、「杉は何気ない風に答えたが」、「もしも」、「しかし」、「それなのに」、「思われてならなかった」といった表現から読み取れるが、杉がこの件をきつかけに、自身が「偽善者」、「ちよつとした傍観者」であったと煩悶し始めることから、杉に感情の揺れを生じさせ、倫理的良心やなすべき行為を省みさせる契機をもたらす存在として閻を位置付けることができる。

また、杉の閻に対する感情の変化は、常に「彼女は果たし

て本当のキリスト教徒だったのだろうか」と、闇のキリスト教信仰に関わる形で展開されている。杉は「口ぎたなく相手を罵り、ちよつとした不平不満でも大げさに表現しなければ気のすまない」闇がキリスト教徒であることを知った当初、「意外」に感じてはいるものの、「かなり読み古されたらしく手垢でよこれ」た「革表紙の祈禱書」を目にすることで、キリスト教徒であることを了解したはずである。しかしその見方は一貫せず、事あるごとに疑問を持つのは何故だろうか。その要因と考えられる点は、次の二点である。

第一の点は、杉と闇の接触状況にある。「その後も時にふれ、二人ぎりの折など闇は近寄つてきて」、「やはり二人だけの折、闇は月給の昇額を杉に頼みこんだことがあった」との記述から、闇が杉との親密な接触を試みる場合、周囲に第三者が見られない状況にあったことが分かる。この第三者の介在しない関係の持ち方から、杉が、闇の意図的な働きかけやしたたかさを連想し、キリスト教徒であることそれ自体も、自身に近付くための闇の口実であったのではないか、との疑問を持ったことが予想される。

第二に挙げられる点は、闇をキリスト教徒らしからぬ人物と見ている周囲の存在である。下宿先の夫人による「ずいぶんわがままな子」、「乱暴でやりっぱなしで仕方ないそうよ。キリスト教ならもう少しおとなしそうなものなのにね」との発言、また闇と日常的に関わりを持つ「中国人の職員もみな彼女を嫌っているらしかった。『杉さん、あんな女、やめさ

せてしまいなさいよ』と言う者」さえいる、との記述も、闇がキリスト教徒らしからぬ人物であることを裏付ける。更に杉においても、上海語教授の場面で、闇の喜び方の簡単なことを「僕を泣き落して少しでも恵んでもらおうとしてかかったのかもしれない」と解釈し、闇の自己中心的性格を認めている。

このように、闇自身がキリスト教徒らしからぬ人物として、杉を含め周囲から評価される人物であったことに、杉に「彼女は果たして本当のキリスト教徒だったのだろうか」との疑問を生じさせ、感情の揺れを助長させる要因があったことが分かる。しかし、この揺れを生じさせるその最も大きな理由となっているのは、前述のように、杉が日本人であることによつて必然的に生じる、杉自身の対中国人感情の複雑さであろう。

続いて、徐光啓の塚を詳細に説明し提示することによつて、杉の感情の揺れを更に助長させている点にふれておく。「闇の問題」を解決する鍵を求め、徐光啓の塚を訪れた杉は、「上海を代表するキリスト教徒の墓」が「純支那式」であったこと、更にはパンフレットには「公ハ終身二色ナシ」とあった徐光啓が「正夫人と三人の妾」と共に葬られている光景を目にする。先に杉は、「聖者の挿絵など見なければ、四書五経の類とかわりはない」、「純支那風」の漢訳聖書に、「ローマ字であらわされた支那音と同様、漢字にあらためられた歐洲の信仰の形」を興味深く感じているが、この漢訳聖書が象

徹的にあらわしているように、キリスト教が中国に導入されたことによって何らかの変化を生じることとは、杉も理解していたはずである。しかし徐光啓の塚には形式ばかりではなく、教義とは相容れないものも見受けられた。この信仰の虚実に関わる異質性に対する、杉の違和感がいかに強いものであったのかは、後の闇との再会の場面で、闇と闇の父が「牧師さんのところへ行く」予定であること、それぞれ「バイブルらしき書物」を手に行っていることを了解しながらも、「しかし、中秋節には、君のところでも紙銭を焚いたり、月宮殿を祭ったりするんじゃないの」と、中国の民俗宗教の儀式を行うのではないか、という疑問を投げかける形であらわれている。

以上の検討から、本作では、キリスト教を諸事情の結節点として杉と闇の関係が形作られていること、しかし同時に、キリスト教が介在するためにかえって両者の関係の不確かさが増幅されていることが確認できた。

四

本章では、闇の杉に対する感情を確認した上で、終盤の再会の場面を考察する。次に挙げる箇所は、闇と杉の交流が深まるきっかけとなった場面である。

しばし想をこらしている杉の背後に、ひそやかによりそう者の衣服がさわった。ふり向くと少しうつむきかげんに、少し笑いながら、両眼をじつとこちらに注いで給

仕の闇が立っていた。(中略) その瞬間はひどくおとなしく、尋常であつた。

この後闇は、杉がキリスト教徒ではないものの、キリスト教徒に悪意を持つていないことを確認した上で、「わたしはキリスト教徒です」と告白する。背後より「笑いながら」杉に視線を向ける闇と、振り返る杉、更に日常とは異なる闇のありようという、この構図と同様の構図が、今問題にしている再会の場面にも見られる。

「杉先生!」／杉は不意によばれて後をふり向いた。少女が一人笑いながら、からかうように瞳をかがやかせて立っていた。(中略) 闇であつた。月光のため、不思議な白粉でも塗ったように白い顔が見ちがえるほど綺麗に見えた。

ここで注目すべきは、二場面とも、周囲を「屈服」させる「乱暴」な人物という闇の日常的なイメージとは相容れない闇の笑顔が描かれている点、重ねて非日常的な闇のありようが強調されている点であろう。闇はこのような意外性、非日常性を伴い、常に杉の背後に現れている。このように類似した場面状況が繰り返し設定されている点からも、後述する本作の主要なモチーフ、杉に驚きと共に受け取られる闇の存在感が、予断として与えられ、示唆されていることが確認できる。

既にその場面状況から、何事かが発生することが予測可能な杉と闇の再会の場面では、自身のキリスト教徒らしさを主

張する閻の言葉、閻の「明確な、決定的な主張」が、杉の「身体をすく」ませ、「顔」をほてらせる「強いシヨック」をもたらししている。先述したように、閻がキリスト教徒か否かの論議は杉にとつて重要な関心事であつた。しかしそれは、杉が閻の、或いは中国におけるキリスト教徒のありかた自体の可否を問題としていたのではなく、杉の内面の問題、中国人閻との相互関係にどのように対処し得るのかという問題に関わる重要性を伴つていた。この閻の「明確な、決定的な主張」により、閻が確かにキリスト教徒であることを確信した杉は、かつて閻のしたたかさを連想した自身を恥じ、「顔がほてる気持」を感じているのである。

ここでは更に、杉の閻に臆首を伝えようとの試みが、杉の閻に関わる新たな（発見）の獲得へと繋がっていく。通常ならば容易に不満や罵りが予想される閻からは、意外にも杉に対する感謝の意があらわされる。

「いいえ、杉先生はいい人です。杉先生の気持はよくわかります。キリスト教徒はみんないい人です」

閻の「口調」にはあくまで日常的な「無邪気」さがあるにもかかわらず、杉は閻の「口調」によつて「強い光線で焼き貫」かれるかのような衝撃を感じている、とある。この閻の「口調」に対して、杉は何故これほどの反応を示すのであろうか。

まずここで、閻が自らの臆首を既に承知した上で笑顔を見せ、杉と再会している点に注意しておきたい。少なくともこ

のことから、閻が杉に以前から好意を持つていたと見ることが可能である。この視点から次いで見ておきたいのは、閻の「杉先生はいい人です。〜」と似通つた表現が見られる、先述した上海語教授の場面である。しかし、両場面の閻の言葉自体は似通つてはいても、その言葉に対する杉の反応は大きく異なる。上海語教授の場面では、「杉さんは良い人です。天主教の人はみな良い人です」と閻がいかにも嬉しそうに笑うのを見た杉は「苦笑」し、先述したように「閻の喜び方の簡単」な理由を閻の狡猾さと「解釈」している。本作ではしばしば閻＝策略家説が誘発されているが、この場面でも同様である。

しかし今問題にしている再会の場面では前者には見られない次のような独自性が見出される。「杉先生の気持はよくわかります」と閻が杉への共感をあらわす点である。この共感とは、閻の臆首に対する自身の不甲斐無さを恥じる杉の心苦しさを軽減しようとする、閻の優しさに他ならない。この閻の自身に対する共感を知り、杉は初めて閻の言葉「杉先生はいい人です」が狡猾さやしたたかさから発した媚ではなく、自身への親密さのあらわれであつたことを悟る（発見）するのである。このように、意識的に自身を相対化する視点を有する杉にとつて、閻との関係を捉え直す契機となつたのが、閻の自身への共感を知つたことなのである。閻に対する自身の理解が一面的にすぎなかつたことを自覚する、その際に生じる緊張が「強い光線」といった比喩を用いて表現されてい

るのである。

また、類似した状況を再度設定し、その差異を際立たせることによって、杉の捉え直しの必然性が強調されていたと見ることが可能である。こうした描出の方法は、先ほど触れた杉の背後に闇のあらわれる構図が繰り返して設定されていた点と同様、価値転倒の思考をさそう武田独自のスタイルとして注目すべき点であると言える。

五

本作では多くの場面で第三者の語り手が直接杉の内情を伝える形をとっているが、作品末尾において語り手の立場は一転し、表面的に、言動そのものに即して描写されるのみである。次に挙げるように、下宿先の夫人と対話する杉は、語り難い状態にあることを示す、未完成な印象を与える（空白）の状態、として表現されている。

「今日はどうでしたの。何か収穫あった？」帰るとすぐ夫人はたずねた。「中秋節はどう？面白かった？」／「そうですね。いろいろのものを見ましたがね」杉はのろろと考えこむようにして答えるばかりであった。「どうって、とてもいろいろのものを見たり聞いたりしましたからね」

これまで本作では、「ある一日」を中心に、上海に居留する杉の認識の変化を辿り、闇との再会によって（発見）の物

語が大きく展開し、結果、この（空白）に至るまでの過程が描かれてきた。その流れの中で捉えれば、既に「懐中の金」が残り少なくなっていた杉が「それでもやっ」と持ち帰った、「セロファン紙に包」まれた月餅とはまさに対照的な、「綺麗な箱につまった立派な月餅」は、先の杉の（空白）を強め、闇の「口調」＝「強い光線」によって「焼き貫」かれてしまった「あいまいな杉の心」＝「おぼろげな月明の想い」の不甲斐無さ、たまたなさをより強調するものとして解し得る。杉がこの「ある一日」の出来事を記憶として再現しようとするれば、否応なく、自身の不甲斐無さを再度自覚させられてしまう。それ故に杉は曖昧に答えを保留せざるを得ず、未完成な印象を与えてしまう。

作品全体を通して、杉の闇に対する当初の認識を正当化する論拠付けは与えられていない。それ故杉は、杉とはまさに対極にある闇の一貫した明確さによって、その曖昧さを露呈していく人物となっている。しかし曖昧さと同時に、幾ばくかの積極性を垣間見せる「今の杉」の姿が冒頭に提示されることによって、眼前に生起する折り合うことの難しい現実を、そのズレごとと捉え込もうとする人物として杉を捉えることが可能となる。

ある一日の印象が、少年の眼に映じた幻灯の一場面のように、いつまでも消えやらずにすることがある。その一日はながくのちの日まで、いつも新しい意味を持ちつけ、親しみぶかく語りかけてくるものである。

また「月光都市」を「発見」し、闇との親和的な関係が予想外に生じたことも確たる事実であることから、この「ある一日」の出来事が、「少年の眼に映じた幻灯の一場面のよう」な幾分不明瞭なニュアンス、自己完結的なナルシズムを漂わせながらも、杉の中国に関わる認識の出発点として、その後の定点的な役割を果たすことになっているのである。

おわりに

本稿では、『月光都市』の重層的な二つの物語、「月光都市」の「発見」の物語と、杉と闇との交流の物語という、二つの物語を中心に考察し、それぞれに独自のモチーフが展開されていることを確認した。

「月光都市」の「発見」の物語と、杉と闇との交流の物語は、中国との距離関係を重要視する杉の姿勢によって繋がる一方、「月光都市」という都市空間（外部）へ開かれていく意識と、闇に関わる個人的関係（内部）へ閉じていく意識としてあらわされている。とは言え、これら中国をめぐる異なる方向性は互いに退け合う矛盾した関係にはなく、杉が「月光都市」において中国民衆との精神的な共鳴に至り、また、中国人少女闇が「杉先生の気持はよくわかります」と杉に共感を示し、ともに杉を受け入れる中国が物語の中軸となっているという点において、両者の同質化が図られている。

しかし一面では、「月光都市」の「発見」の物語において

獲得された中国民衆の「発見」はかりそめの「おぼろげな月明の想い」に過ぎなかったこと、また杉自身も闇を含め中国の現実に対する傍観者にすぎなかったこと、この明らかに照応関係にある二つの問題点を、中国人少女闇が浮き彫りにする関係にもあった。

これらの展開の背後には、当時の日本の国家権力と重ねられる日本人青年杉の虚像を崩すと同時に、中国人少女闇の固有の存在権を主張させる構図が明らかであろう。つまり本作は、日本人杉の中国認識の変容を主題としながら、ひとたびは「よりどころ」を喪失した日本人青年杉と、周囲に誤解されながらも誠実に生きていこうとする中国人少女闇によって、戦時下上海における加害者（日本人）／被害者（中国人）の構図を改めて問い直そうとした物語であったと捉えることができるのである。

注

（１）例えば奥野健男は、武田は「自己の中にある中国に対する罪悪感を徹底的に批判することから出発しようとした」（『武田泰淳論——劣等感補償の文学——』昭二十九・八「文学界」）と指摘し、また小嶋知善は『審判』（昭二十二・四）にふれながら「武田はこの「審判」で（中略）二郎に託して中国に対する贖罪感も示したのである。この「審判」という困難な小説を書くことで武田の作家としての立脚地は確かなものになった」（『武田泰

淳『嫂のすえ』論——戦後への出発——」平六・十二「目白学園女子短期大学研究紀要」三二」と位置付けている。

(2) 作中に具体的な説明は見られないが、作者武田が上海で実際に従事した、中日文化協会を指すものと考えられる。高橋正「上海・一九四四——武田泰淳の場合——」(『待兼山論叢・日本学篇』平十四・十二)では、『上海の螢』(昭五十一・二・九)の登場人物に匿名表現が用いられる理由を、この中日文化協会の「国策推進団体の性格によるもの」とし、武田自身、中日文化協会の活動内容を明らかにしないこと、そのような態度は当時の関係者に共通するもの、としている。また、次は戦後、武田が上海居留当時に回想し語ったものであるが、

(前略) 私は日本帝国の権力の方にとりすがって生きて

いたわけである。そのとき自分が、たといどんな思想を持っていたとしても、現実には、その当時の上海で暮らしていた人間は、日本人である限り、占領中の日本国、または日本軍の力で生きていたことになる。しかし、そのことについては、ほとんど気がつかないで、あたりまえに自分は自分で生きていると思っていた。

(『人間をささえるもの』昭三十三・二)とあるように、武田自身の中国に対する意識とは無関係に中国に対する加害者の位置に立っていたことが語られている。

【付記】本文の引用は筑摩書房刊『武田泰淳全集第一巻』(昭四十六・十)に拠った。

(まつもとようこ／本学大学院博士後期課程)